同性愛者（LG）への態度と被異質視不安傾向・異質拒否傾向との関連

The Effect of Anxieties about being thought different from others and Tendency toward Uniformity on the Attitude to Homosexual

田中　美月，伊藤　　拓，葛西真記子

TANAKA Mizuki, ITO Taku and KASAI Makiko

鳴門教育大学学校教育研究紀要

第 33 号

Bulletin of Center for Collaboration in Community
Naruto University of Education
No.33, Feb., 2019

原著論文

鳴門教育大学学校教育研究紀要　33，121 － 129

同性愛者（LG）への態度と被異質視不安傾向・異質拒否傾向との関連

The Effect of Anxieties about being thought different from others and Tendency toward Uniformity on the Attitude to Homosexual

田中　美月*，伊藤　　拓**，葛西真記子***

*〒772‐8502　鳴門市鳴門町高島字中島748番地　鳴門教育大学学校教育研究科
**〒108‐8636　東京都港区白金台１－２－37　明治学院大学心理学部
***〒772‐8502　鳴門市鳴門町高島字中島748番地　鳴門教育大学大学院

TANAKA Mizuki*, ITO Taku** and KASAI Makiko***
* Naruto University of Education, School Education
748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi, 772-8502, Japan
** Meijigakuin University
1-2-37 Shirokanedai Minato-ku Tokyo, 108-8636, Japan
*** Naruto University of Education
748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi, 772-8502, Japan

抄録：同性愛者であるレズビアン・ゲイ（以下LGとする）に対する理解は深まっているが，差別・偏見等否定的態度は未だ存在している。LGへの否定的態度は当事者の心理的健康を低減させうるといわれており，偏見を強める要因を検討する必要があると考える。

中学生頃に見られるチャムグループという関係性では，同質性を重視して維持され，自分と異質な存在を拒否する心性が生じる。本研究では，異質性拒否の心性である被異質視不安及び異質拒否傾向と，LGに対する態度の関連を検討することと、特に異質であるものに否定的な中学生の方が大学生より否定的であるかどうかを検討することを目的とした。その結果，被異質視不安・異質拒否傾向が高い場合，LGへの態度は否定的であった。異質拒否傾向がネガティブイメージに影響したことは，同性愛に対する知識の無さが外集団に対する偏見を増したためと考えられる。

キーワード：異質性拒否，同性愛，チャムグループ，中学生

Abstract：Recently, it seemed the understanding for homosexuality has been growing. However, prejudice and negative attitudes towards them have still existed. Many research showed that negative attitudes have negative effect on lesbians and gay men's mental health. Therefore, we need to find the factor which strengthen these negative attitudes. Junior high school students tend to establish chum-group relationship which emphasize the sameness and heterogeneousness among the group and this kind of relationship tend to exclude the difference among group members. In this study, we focus on this tendency to find the relationship with the attitudes towards homosexuality. We compared this attitude with those of college students. Results showed that the high anxieties about being thought different from others and the tendency toward uniformity related with the negative attitude towards homosexuals. We concluded that the reason for this tendency was not having accurate and appropriate knowledge about homosexuality.

Keywords：homosexual, negative attitude, chum-group, junior high school

Ⅰ．問題

１．はじめに

レズビアン・ゲイ（以下，LGとする）の定義は明確には定まっておらず，当事者の自認によるところが大きい。石丸（2003）は恋愛感情や性的魅力を同性に対して感じるかを基準に定義し，葛西（2011）は同性愛及び両性愛を「性的指向が一時的，または永続的に同性あるいは両性に向いており，自らをLGBと名付けている人々」と定義した。性的魅力に関してはノンセクシュアルの人々の存在を考慮に入れるべきであると考えるため，ここでは葛西の定義を用いる。

2．LG を取り巻く現状

LG に対する人々の理解は深まってきており，2015 年，日本の渋谷区での同性パートナーシップ条例の施行，世田谷区のパートナーシップ証明書発行，兵庫県宝塚市での施行発表など，法的にも少しずつ認められつつある。異性愛者同士のパートナー関係と比較すると認められていない権利もあるが，少しずつ性のダイバーシティが認められる社会へと変化してきた。

しかし，2015 年に吉仲・風間・石田・河口（2015）が行った，同性愛や性同一性障害など，セクシャル・マイノリティの人に対しどう思うかという意識調査では，同性婚反対派の割合は 48.9%であり，友人が同性愛者であった場合抵抗がある人の割合が男性で 53.2%，女性で 50.4%であった。関係の近い人ほど嫌悪的な意見が多くなり，同僚では 42%，子どもでは 72%の参加者が，同性愛者であったら嫌だと回答している。他に特徴的な結果として，同僚が同性愛者であったら嫌だと回答した 40 代男性の割合は 71.5%であった。Pew Reseach Center (2013) が世界 38,000 人を対象に実施した同性愛に対する社会的容認度の調査においては，日本では同性愛を容認する派は全体で 54%，内訳として 30 歳未満では 83%，30 歳～ 49 歳で 71%，50 歳以上で 39%であった。2007 年度の調査結果である 49%と比較して 5 ポイント上昇したが，80%～ 90%であるスペイン，ドイツ，カナダなどの国々と比較すると，未だ否定的な見方が強いと言える。

また，2010 年には都知事が同性愛者に対し「足りない感じがする。遺伝とかのせい」「本当に気の毒」といった発言をしている。2015 年には市議会議員が「同性愛者は異常動物」と発言して問題視されている。このような感情面での無理解，差別の問題は続いている。

3．偏見とその要因

偏見はここでは，池上（2014）の定義である「対象に対する否定態度を指し，対象集団に関する否定的内容の信念や感情，行為意図を含んでいる」とする。しかし Allport（1954 ／ 1968）は，偏見が圧倒的に好意的よりも非好意的な方向に存在していることを指摘しつつも，「偏見とは，実際の経験より以前に，あるいは実際の経験に基づかないで，ある人とか物事に対してもつ好きとか嫌いとかいう感情である」と，肯定的偏見の存在を含めた，広義での偏見の捉え方について述べている。

偏見研究には，これまで人格心理，集団心理，認知心理といったさまざまなアプローチがとられ，偏見を解消する試みがなされてきたが，偏見の問題の解決は未だ困難であるといえる（池上，2014）。長らく偏見研究は質問紙調査による自己報告法によって行われたが，ある時，質問紙調査の結果に差別的意識が存在しないにも関わらず，社会には差別が存在していることを示す研究結果が増加した（池上，2014）。ここから，偏見，差別が社会的には容認されないことを理解し，平等的に振舞おうとはするものの，無意識下には差別的意識があるという，隠れた偏見の存在，対象に対する意識が意識レベルと無意識レベルで異なる可能性が指摘された。

偏見を解消するための理論の 1 つとして，Allport（1954 ／ 1968）は接触仮説を提起した。偏見は相手に対する知識の欠如が大きな原因であるため，接触し正しい情報を得ることで偏見は解消するとの主張である。人は自分の否定的態度を説明する際，否定的に接する集団に特徴づけられる性質を挙げ，自身の所属する集団との差異の存在こそが否定的態度の根拠であるとする。実際には差異は必ずしも偏見の直接的な要因になるとは限らないが，差異は否定的態度の根拠と主張する者は多いと述べている。そのため，差異が存在しないまたは小さいという事実は，偏見を持つ人々の主張を弱めるのであろう。しかし同性愛への態度についての先行研究では，差異が大きい異性の同性愛者よりも，差異の小さい同性の同性愛者の方により嫌悪・拒否的感情を持つことが明らかになっており（和田，1996），直接的要因とは言い難いだろう。

Allport（1954 ／ 1968）はまた，偏見に基づく否定的行為を，最少のエネルギー順に誹謗，回避，差別，身体的攻撃，絶滅の 5 段階としている。LG への偏見で言えば，同性愛者を話題として周囲を笑わせる「同性愛ネタ」などの誹謗，周囲の人間が同性愛者であったら嫌だという感情である回避に関しては，比較的日常の中に見られることがある。また，彼は差別の定義を，集団に所属するメンバーすべてを職業，住居，教育，レクリエーション，社会的特権などから締め出そうとする行為であるとしている。大きな問題としては，1990 年に東京都教育委員会が，動くゲイとレズビアンの会（NPO 法人アカー）に対し，青少年向け宿泊・学習施設の利用を同性愛者であることから拒否した東京都青年の家事件が挙げられる。しかしそういった大きな問題の解決だけが求められているのではない。伊藤（1998）は新しい家族の形を問うシンポジウムの際に，参加者から「マイノリティなのに気が短い，決して怒らずにやさしく伝えようとしなければ同性愛は理解されない」と主張され憤慨したと述べている。このように，一見非常に些細に見え，非当事者が差別として認識していないことが，差別の一端を担っている。これが現在に至るまで，偏見，差別の解消が容易ではない一因ともなっている。

LG に対する偏見を強める要因についての先行研究として以下が挙げられる。和田（1996）は，男性は女性よりも同性愛に心理的距離感を持っており，更に社会がそれぞれの性に期待する性格特性に一致する者ほど，同性

愛者への態度が否定的であることが明らかとなった。桐原・坂西（2003）も同じく，日本における男性役割，女性役割に対する固定的な観念の存在を指摘している。

ここから，同性愛に関する知識が少ないほど，同性愛に対して否定的なイメージを持つと言える。それによって非当事者は，同性愛について現実と乖離したイメージを持ってしまいうる。そのため，同性愛を過度に隠し，タブー視することが，偏見を生む１つの要因になっていると考えられる。

接触体験や知識が豊富であるほど同性愛に対する態度が肯定的なことは，友人が同性愛者であると開示された場合同性愛への見方が好意的になるという研究結果（和田，2010）や，同性愛者との接触体験は，同性愛者への態度に良い影響を与えるという研究結果（山本・大蔵・重本，2012）からも言える。

４．中学校におけるLGへの偏見を強める要因

対象に対する適切な接触と正しい知識の不足は，偏見を強めることがすでに指摘されているが，学校教育におけるLGを含む性的マイノリティへの正しい知識の普及は始まったばかりであり，十分とは言えない。2017年度の教科書改定で，中学生用の道徳の教科書の一部がセクシャルマイノリティについて取り上げたが，採用しない学校も多く，どのように使用・指導するかは教員に任せられている。またそれ以外の教科書には，男女交際を当然のものと想定した記述や，男らしさ，女らしさが期待される記述も残っている。小学校・中学校の保健の教科書では，思春期を迎えると，人は異性への関心が芽生える，関心が高まるとの記述がある。性の多様性についての記述が見られるのは主として高校教科書であり，性指向を自覚する時期を迎える中学生に対して，正しい知識が不足しているのが現状である。

性同一性障害等，ジェンダーアイデンティティへの特有の支援や相談体制の充実については，個別対応するよう文部科学省からの通達が行われたが，自身のセクシャリティに困惑していたり，周囲に相談できないなど，教員に伝わらないことも多いだろう。あらゆる場面で，異性愛主義を前提のものとせず，性の多様性を学ぶ教育が必要であろう。

石丸（2001）は，同性愛アイデンティティの発達過程として，①同性愛に嫌悪感を持つ時期，②同性愛と異性愛のどちらに価値を置くかで混乱し揺れ動く時期，③同性愛・異性愛ともに安定した価値づけができ同性愛が自己に上手く統合された時期の３段階を提案している。思春期を迎え性的指向に関心が向く中学校頃に，同性愛に嫌悪感を持つ時期があることが，LGへの否定的感情を強めると言える。

また，コミュニティに参加しているセクシャルマイノリティは，安定した全体的同一性の感覚を持っていること（西谷，2014），自尊心に良い影響を及ぼしていたこと（三宮，2014）から，第３段階目に到達することの好ましさが示されている。反面，同性愛者であることを受け入れられない段階では誰にも相談できず，孤独感や孤立感を強め，不適応を起こしたり，自殺を考えてしまう場合もある（河口，2010）。同性愛者の自己受容の過程において親密な対人関係が妨げられる可能性がある（堀田，1998）が，中学校以前でセクシャリティを自覚した場合，コミュニティへの参加や当事者・周囲からの相談体制は充実していない。そのため，中学校段階ではより自己のセクシャリティを隠したり，同性愛へのネガティブイメージが持たれやすいと考えられる。

思春期特有の人間関係も，集団に対する排除，否定的態度を助長しうる。中学・高等学校における友人関係の難しさは須藤（2012）などによって指摘されている。須藤は女子大学生を対象に，前青年期以降の友人関係において，よかったことと，難しかったことについて自由記述形式で尋ねた。その結果，難しかったことについては，中学時代から高校時代にかけての友人グループに関するものが多く，作成されたカテゴリーとしては，「グループ行動，グループによる拘束，束縛」，「グループ内の人間関係」，「グループ内のいじめ」，「グループ間の対立」，「キャラを演じる」などがあった。これらには，友人グループの関係を築く上での難しさに触れたものが多く，友人とうまくやっていくために気を遣い，自分の意見を抑えて友人に同調したり，複数の友人との多様な力動をはらんだ関係を維持することに窮屈さを感じている様子もみてとれたとしている。

小学校高学年から中学生頃には，チャムグループと呼ばれる関係性が構築される。同性の，共通の興味・関心をもつ者同士が形成した集団である。ここでは，類似性を持つ者同士という安心感が集団基盤となっており，異質性を集団から排除することにより維持される。須藤（2014）は，チャムグループについて，いじめが発生しやすいが，思春期の不安な心を，誰かを異質なものとして排除することによって紛らわせているとみることもできるのではないかと述べている。高坂（2010）は，現代青年に特徴的な表面的な友人とのつきあい方について，青年は異質を拒否する傾向である異質拒否傾向と，異質な存在に見られることに対する不安，被異質視不安を持つことを指摘し，友人関係満足度との関連を調査した。その結果，被異質視不安は年齢が上がるとともに低減することを明らかにした。

ここから，性的指向の点で異質であるLGは，同質性を重視するチャムグループに異質として拒否されると予想される。また，非当事者の態度は，同質性の維持のために多数派である同性愛に否定的な方向性に変化する可

能性があると考えられる。その結果，年齢が低いほど同性愛に対する態度は否定的であり，年齢が上がるほど同性愛への態度は肯定的であると予想される。

また，チャムグループは年齢が上がるとともに異質性を認め合う関係性であるピアグループへと変化していく（Sullivan，1954／1990）。そのため，チャムグループを構成する中学生よりも，主にピアグループを構成する大学生は，同性愛への態度が肯定的と考えられる。

現在この２つの関連を検討した研究は見られないが，被異質視不安・異質拒否傾向の高さが同性愛への偏見を強める要因であれば，被異質視不安・異質拒否傾向を低減させることで，同性愛への偏見が緩和されうると言えよう。

小学校から中学校段階で見られる友人関係は，異質性を集団から排除するという特徴がある。また，自身の所属するグループを維持するために，自身の意見を主張せず，他者に同調するという人間関係の形成が指摘されている。これは，集団への帰属，同調意識が強い者ほど異質な存在への拒否反応が強く，また友人関係にある他者が偏見を持っていた場合，友人からの拒絶を恐れ，同じように対象に対して否定的態度を持とうとすることになると推測される。本研究では，非当事者の被異質視不安，異質拒否傾向と，同性愛の関連を調査し，大学生，中学生とで比較検討した。

本研究の仮説は以下の２つである。

仮説１　中学生は大学生と比較して，同性愛への態度が否定的である。

仮説２　被異質視不安・異質拒否傾向が高い参加者は，同性愛に対する態度が否定的である。

Ⅱ．方法

１．調査方法

質問紙による調査を，４年生私立大学と公立中学校で行った。４年制私立大学では，心理学系授業にて質問紙を配布し，その場で回答できる参加者はその場で，一旦持ち帰りたいとした参加者は２週間後に，同教室で回収した。配布する際には，注意事項を説明した。中学校では，フェイスシートの注意事項を読み上げてもらった上で，各担任が配布，その場で回収した。

２．調査対象

４年生私立大学の学生118名（男性22名，女性96名）及び，公立中学校の３年に所属する生徒266名（男性138名，女性128名）に調査協力を求めた。その中から，同性に恋愛感情を抱いた経験があると回答したデータ及び，回答に欠損のあった21名分のデータを排除し，残った368名のデータを分析に使用した。大学生107名（男性20名，女性87名），中学生261名（男性135名，女性126名）であった。調査時期は，大学生が2016年10月26日，中学生が2016年11月１日であった。

３．調査内容

調査を行うにあたって，後述する尺度は全て尺度作成者から利用許可を得た。

１）フェイスシート

回答にあたっての謝辞や，回答する際の注意事項を記述した。質問紙の構成や，無記名での回答が可能であること，回答は任意であり，回答の中止が可能であること，回答は個人が特定されないような形で処理し，発表することを記載した。大学で配布した質問紙には，調査に関して不明な点があった場合に調査者へ連絡を取ることが出来るようメールアドレスを記載したが，中学校での実施の際は，調査実施校の生徒のプライバシー保護の観点から記載しないとし，調査者の氏名，所属校，指導教員名を記載した。

また，質問紙の最後に，本調査に対する意見等があった場合，自由記述で回答できる欄を設けた。結果を知りたい，不愉快だ，同性愛は自由だといった意見が散見されると共に，「レズビアン，ゲイではなく，百合，ホモと呼称してほしい」「BLと呼称してほしい」などの呼称への意見が４件見られた。

２）個人情報の調査

回答者の性別・学年の回答を求めた。また。同性愛という言葉を知っているか，それをどこで見聞きしたか，同性を恋愛対象と感じた経験があるかの回答を求めた。

３）使用尺度

・同性愛に対する態度尺度

調査対象者の同性愛に対する態度を測定するために，和田（1996）が作成した尺度である。この尺度は48項目からなり，1996年と2008年に異なる因子分析が行われた。同性愛者とは関わりあいたくない，同性愛者には近寄り難い等の16項目からなる「嫌悪・拒否」，同性愛者は暗い人が多い，同性愛は間違っている等の12項目からなる「ネガティブイメージ」，同性愛は自由な恋愛の象徴だ，同性同士の結婚も法律的に認められるべきだ等の13項目からなる「容認・寛容」の３つの下位因子および，残余項目の７項目から構成される。今回の研究では，中学生に回答させる際に不向きと考えられた，「同性愛者を上司に持ちたくない」の項目を除外し，因子負荷が高い順に各下位因子を８項目ずつ用いた。

「以下のそれぞれの文に対して，あなたの今の考えにもっとも当てはまるものを以下の当てはまる～当てはまらないから１つ選び，数字を丸で囲んでください」という教示文を提示し，これらの項目について，５件法で尋ねた。

・被異質視不安項目・異質拒否傾向項目

調査対象者の友人への被異質視不安，異質拒否傾向を測定するために，被異質視不安項目・異質拒否傾向項目を用いた。高坂（2010）が，異質を拒否する心性として作成した，被異質視不安傾向および異質拒否傾向を測定する尺度である。できるだけ友達と同じであろうと気を使っている，友達と違う意見を言うのが怖い等の12項目から構成される「被異質視不安」，同じ価値観の友だちとだけ付き合いたい，気があわない友だちとは関わりたくない等の12項目から構成される「異質拒否傾向」の2つの下位因子から構成される。今回の研究では，24番目の項目にあたる，被異質視不安を測る設問，友だちと一緒にいないと不安になるを不注意から質問紙に掲載していない。25項目から構成され，1項目を削除した上で，十分な内的一貫性があるとした。

高坂（2010）は，被異質視不安を「同性友人との関係において友だちから異質な存在として見られることに対する不安」，異質拒否傾向を「同性友人との関係において自分とは異質な存在を拒否しようとする傾向」と定義している。被異質視不安や異質拒否傾向は，青年期前期ではともに高いが，年齢を経るにつれて，被異質視不安が低減することが示されている。

「あなたが同性の友人とつきあうときの気持ちや考えにどの程度あてはまりますか。もっとも近いものを1つ選び，数字を丸で囲んでください。」という教示文を提示し，これらの項目について，5件法で尋ねた。

4．分析

分析にあたって，SPSSV23を用いて統計処理を行った。大学生，中学生それぞれにおいて，被異質視不安，異質拒否傾向が同性愛に対する態度に及ぼす影響を検討するため，各尺度間の相関係数を算出，及び一元配置分散分析によって各下位尺度の学校段階による差を算出した後，被異質視不安・異質拒否傾向を説明変数，同性愛に対する態度の下位因子を目的変数として，重回帰分析の繰り返しによるパス解析をおこなった。

Table 1　大学生における各尺度の記述統計量（N = 107）

		平均値	標準偏差
同性愛への態度	嫌悪・拒否	20.70	5.28
	ネガティブイメージ	13.37	4.59
	容認・寛容	30.83	6.38
被異質視不安	被異質視不安	30.96	8.09
異質拒否傾向	異質拒否傾向	29.77	7.150

Table 2　中学生における各尺度の記述統計量（N = 261）

		平均値	標準偏差
同性愛への態度	嫌悪・拒否	23.73	6.60
	ネガティブイメージ	16.35	5.77
	容認・寛容	27.05	6.78
被異質視不安	被異質視不安	30.35	9.71
異質拒否傾向	異質拒否傾向	25.04	9.60

Ⅲ．結果

1．各尺度間の相関分析

初めに，大学生と中学生それぞれで各尺度間の記述統計量を算出し，結果をTable 1，Table 2に示した。次に大学生と中学生それぞれの，各尺度間の相関係数を算出した（Table 3，Table 4），その結果，大学生では，異質拒否傾向と嫌悪・拒否の間にのみ低い正の相関が見られた。中学生では，被異質視不安と嫌悪・拒否の間に低い正の相関，異質拒否傾向と嫌悪・拒否，異質拒否傾向とネガティブイメージの間に低い正の相関が見られた。

2．分散分析による各学校段階間の下位尺度の差異

学校段階による各下位尺度の得点に差があるかを検討するため，大学生，中学生それぞれにおいて，被異質視不安，異質拒否傾向，嫌悪・拒否，ネガティブイメージ，容認・寛容を従属変数，要因を学校段階として，一元配置分散を行い，その結果をTable 5に示した。嫌悪・拒否，ネガティブイメージ，容認・寛容，異質拒否傾向において，学校間で有意差が見られた。

3．被異質視不安・異質拒否傾向と同性愛に対する態度の関連

被異質視不安・異質拒否傾向と同性愛に対する態度がどのような関連を示すかを検討するため，大学生，中学

Table 3　大学生における各尺度間の相関係数（N = 107）

		1	2	3	4	5
同性愛への態度	1 嫌悪・拒否	—				
	2 ネガティブイメージ	.577**	—			
	3 容認・寛容	-.381**	-.395*	—		
被異質視不安	4 被異質視不安	.126**	.026	.170	—	
異質拒否傾向	5 異質拒否傾向	.265**	.195	.029	.411**	—

*p<.05　**p<.01

Table 4　中学生における各尺度間の相関係数（N = 261）

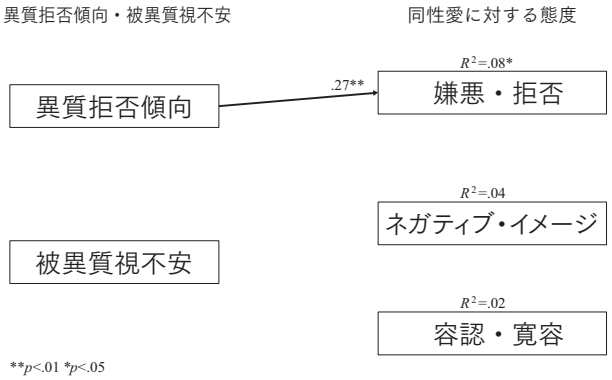
		1	2	3	4	5
同性愛への態度	1 嫌悪・拒否	—				
	2 ネガティブイメージ	.520**	—			
	3 容認・寛容	-.325**	-.451**	—		
被異質視不安	4 被異質視不安	.261**	.178**	-.059	—	
異質拒否傾向	5 異質拒否傾向	.269**	.297**	-.083	.473**	—

**p<.01

Table 5　異なる学校段階における各尺度の分散分析

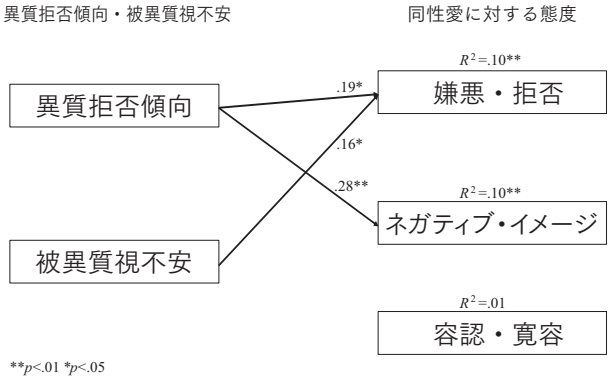
		自由度	F　値
嫌悪・拒否	グループ間	1	17.681**
	グループ内	356	
	合計	357	
ネガティブイメージ	グループ間	1	22.053**
	グループ内	350	
	合計	351	
容認・寛容	グループ間	1	25.915**
	グループ内	350	
	合計	351	
被異質視不安	グループ間	1	.n.s
	グループ内	357	
	合計	358	
異質拒否傾向	グループ間	1	20.710**
	グループ内	353	
	合計	354	

**p<.01　n.s. not significant



**p<.01 *p<.05

Figure 1　大学生の異質拒否傾向と被異質視不安が同性愛に対する態度に与える影響



**p<.01 *p<.05

Figure 2　中学生の異質拒否傾向と被異質視不安が同性愛に対する態度に与える影響

生それぞれにおいて，被異質視不安，異質拒否傾向を説明変数, 同性愛に対する態度尺度の下位因子である嫌悪・拒否，ネガティブイメージ，容認・寛容を目的変数として重回帰分析（強制投入法）を行った。多重共線性を検出する Variance Inflation Factor（VIF）を算出したところ，どれも VIF ＜ 2 であったため，多重共線性は見られなかった。

大学生においては，異質拒否傾向から嫌悪・拒否に正のパスが見られた。中学生では，被異質視不安，異質拒否傾向から拒否・嫌悪に正のパスが見られた。また，異質拒否傾向からネガティブイメージに正のパスが見られた。この結果を元にパス図を作成した（Figure 1，Figure 2）。

Ⅳ．考察

本研究では，中学生は大学生と比較して，同性愛への態度が否定的である，また，被異質視不安・異質拒否傾向が高い参加者は，同性愛に対する態度が否定的であると仮定し，検討を行った。その結果，仮説は支持される形となった。

1．学校段階による同性愛への態度及び被異質視不安，異質拒否傾向の差

分析の結果，中学生と大学生の間に同性愛に対する態度の 3 つの下位尺度全てで有意な差が見られた。よって，中学生は大学生と比較して，同性愛への態度が否定的であることがわかった。また被異質視不安では有意差が見られず，異質拒否傾向では有意な差が見られた。ここから，大学生は中学生よりも異質拒否傾向が強いことが分かった。これは，異質拒否傾向は青年期を通して変化せず，被異質視不安は年齢が上がるに伴って低減するという先行研究の結果とは異なる結果であった。先行研究においては，男子大学生，女子大学生の異質拒否得点の平均はそれぞれ 2.48，2.49，男子中学生と女子中学生の平均得点は 2.60，2.52 であったが，今回の研究では男子大学生，女子大学生の異質拒否得点の平均はそれぞれ 2.85，2.59，男子中学生と女子中学生の平均得点は 2.79，2.15 であった。被異質拒否視不安に関しても，中学生では先行研究に近い結果が出ているが，大学生では先行研究と比較して，先行研究の平均は男子大学生，女子大学生でそれぞれ 2.27，2.58 だが，本研究では 2.83, 2.81 と高い数値が見られたが, 有意な差は出なかった。

この結果に関しては，第一に中学校の校風の影響があると考えられる。高坂（2010）は，異質拒否傾向をいじめ研究において指摘されてきた異質者排除意識と関連した心性だと考えられると述べている。調査を実施した中学校では，道徳教育やいじめをなくす活動に力を入れており，細やかな生徒指導を重視している。それゆえ，教育によって異質拒否傾向が低減した可能性がある。また，特別支援学級が設置されており，何らかの身体機能や発達において異質な生徒との接触によって，正しい知識をもっていた可能性もあるだろう。

第二に，学級集団凝固性の影響が考えられる。藤村・越（2010）は，個人間のみならず学級全体の認知として，

他者との友人関係や集団に所属するといった類似性の認知による安心感の増加，自尊感情の維持・高揚によって他者の異質性を認知することが可能になり，親密でない他者を受容できるようになる。その結果異質であった他者に類似性を見出し，一定の類似性認知を得ると，その安心感から新たな異質である他者を受容できるようになる，という繰り返しによる学級集団凝集性，集団から得る安心感を指摘している。本研究では，中学生はクラス単位での活動を３年間続けており，学級集団凝集性が高まっていたが，大学生ではクラスや公のグループが存在せず，集団としてのまとまりが薄かったこと，調査参加者である２年生は，週に数回のみ訪れる慣れない校舎での授業であったこと，また，大学全体の男女比が１：２であり，男子大学生が学級集団凝集性を感じにくかったことが，大学生，特に男子大学生の異質拒否傾向を高めたと推測される。高坂（2010）は，被異質視不安は，青年期の自己中心性によって異質拒否傾向から生じると推測している。また，自己中心性は年齢と共に青年期後期に向けて減少する（Elkind & Bowen, 1979　高坂（2010）からの孫引き）ため，大学生においては高い異質拒否傾向を持っていても，自己中心性の低下によって被異質視不安は高まらなかったと推察される。

２．学校段階ごとの被異質視不安・異質拒否傾向が同性愛に対する態度に及ぼす影響

分析の結果，大学生では異質拒否傾向と嫌悪・拒否との関係の間に有意な正のパスが見られた。一方，中学生では，被異質視不安と嫌悪・拒否との関係の間，および異質拒否傾向と嫌悪・拒否，ネガティブイメージとの関係の間に有意な正のパスが見られた。

したがって，学校段階によって，被異質視不安・異質拒否傾向が同性愛に対する態度に差が生じることがわかった。中学生において，被異質視不安が同性愛に対する嫌悪・拒否に影響するのは，中学生は大学生と比較して自己中心性が高いため，異質拒否傾向が高い参加者は自身と同程度に周囲も異質拒否傾向を持つと考え，被異質視不安から嫌悪・拒否の心性を生じたと考えられる。

中学生においてのみ，異質拒否傾向が同性愛者のネガティブイメージに影響した点については，同性愛に対する知識の無さが，外集団に対する偏見を増したと考えられる。同じ意見を持った友人のみと関わりたいという心性は，外集団に対する知識を取り入れないという行動に繋がる。人は内集団と比較して，外集団に対しては多様性を認知せず，一様に認知する（唐沢，1999）。中学生は大学生よりも狭い知識入手ルートを持つために，テレビなどのメディアが発信するネガティブな同性愛者のイメージをそのまま受け入れたと考えられる。

また，Brislin（1981）は偏見の４つの機能として功利的・適応的機能，自己防衛機能，価値観の表現機能，情報としての機能を挙げている。このうち功利的・適応的機能は，所属している集団から偏見を示すことによって評価されるか，あるいは否定的評価を受けないための偏見である。大学生では，偏見を持つことは好ましくないという社会通念を持っており，偏見を持っていても偏見を隠す場合がある。一方で，中学生ではまだ偏見を持っていることを隠すべきだという社会通念を持たず，むしろ同性愛への偏見を示すことが，共通の話題として仲間から肯定的評価を受けうるという点で異なる。中学生ではこういった周囲の同性愛に対する態度が情報源となり，ネガティブなイメージが持たれやすいのではないかと考えられる。

３．研究の限界と展望

本研究の問題点の１つとして，サンプルの偏りが考えられる。大学のサンプルのほとんどは心理学部の学生であり，男女比が大きく異なる。一方の中学校は公立の１学年のみである。藤井（2005）は福祉系の学生は，社会的に容認されていない人々に対し同情的であるとの示唆をしており，これは人を支援することを目標に学ぶ心理学部にも同様のことが言える。異なる学部や学科で調査を行うか，学部や学科によって同性愛に対する態度が変化するのかを検討すべきであろう。また，両学校段階にも言えることだが，一校のみの調査では，校風や地域差，男女比といった影響を除外できない。調査対象を広げることで，より正確な結果が得られるだろう。

次に，同性愛に対する態度を調査したが，この各参加者の持つ同性愛者のイメージを統制していない点である。中学生に対する調査では，友人などの身近な人に同性愛者がいるために同性愛を知っていると回答したデータが時折見られた。和田（2010）は友人が同性愛者であったと開示したことを想定した研究を行った結果，友人と交わしたい行動が減少した反面，同性愛に対する態度は開示後の方が肯定的に変化したことを報告している。開示した関係が親密か否かによっても変化する以上，同性愛者と聞いてイメージしたイメージ上の同性愛者が，全くの空想上の存在なのか，メディアに登場する存在なのか，自分自身や友人や知人なのか，更に友人であれば親しいのかといった情報は，同性愛に対する態度を変化させる要因として検討されるべきであろう。

Ⅴ．結論

本研究では，被異質視不安及び異質拒否傾向が高いほど，同性愛に対する否定的態度，偏見が強いことが示された。この結果は，様々な友人と付き合い，人間の多様性を自然に受け入れることが，同性愛に対する態度を否

定的にせず，ひいては偏見の低減につながることを示唆している。

高校で開始されるLGBT教育，性同一性障害への支援や対応など，LGを含む性的マイノリティへの理解は少しずつ進んでいる。しかし，特に年齢の低い者が同性愛に対し否定的な態度をとることは，同性への性指向を自認したばかりの思春期の子供にとって，心理的健康を容易に低下させる引き金になると推測される。マイノリティな性指向を持つ子供は常に一定数存在すると推測できるため，この問題が常に考慮されるべきものだと言えるだろう。同性愛に対する態度を変化させる要因を特定し，態度を肯定的に変化させることは，LGの人々の心理的健康を増進するために重要な役割を持つ。また，先行研究で異質拒否傾向といじめとの関連の研究が今後の課題として挙げられている（高坂，2010）が，被異質視不安や異質拒否傾向の同調意識が，同性愛への否定的態度や偏見に影響を与えることは，特にLGへのいじめを助長する可能性もあると考えられる。

Allport（1954／1968）はまた，「個人の態度よりも集団の態度を変えるほうがやさしい」と主張する。個々人に偏見的態度を形成させるようになる諸要因はむしろ所属する集団にあり，児童の意識を変えるのに重要なのは児童にとって重要な集団の文化的規範，家族，仲間，近隣者が寛容になることが重要だと述べている。また，個人の態度が新しい集団規範に同調することも指摘している。人の差異を個性として受け入れ，異質拒否傾向や被異質視不安が低減する教育や関与が学校現場で行われ，集団として同性愛に寛容な集団規範を作ることが，同性愛への否定的態度や偏見を低減させるだろう。いずれ性選択を含むあらゆる物事に対し，一人ひとりの差異を自分らしさとして認められる社会が来ることを願う。

Ⅵ. 引用文献

Allport.G. (1954). The nature of prejudice. Reading, MA: Addison-Wesley.（オールポート, G. 原谷達夫・野村昭（共訳）（1968）．偏見の心理　培風館）p.36 － 37，45 － 46，74 － 76.

Blislin, Richard W. (1981). Cross-Cultural Encounters: Face to Face Interaction. New York:Pergamon Press, 42-53.

Sullivan,H,S. (1953). The Interpersonal Theory of Psychiatry.（サリヴァン，H，S. 中井久夫・宮崎隆吉・高木敬三・鑪幹八郎（共訳）（1990）．精神医学は対人関係論である　みすず書房）

藤井宏明（2005）．福祉系学生とその保護者に対する同性愛の受容に関する意識調査　日本性科学会雑誌，23⑴，30 － 36.

藤村　敦・越　良子（2010）．中学生における個性の類似性・異質性認知と学級集団認知との関連　北海道教育大学紀要，教育科学編，61⑴，63 － 74.

堀田香織（1998）．男子大学生の同性愛アイデンティティ形成　学生相談研究 19⑴，13 － 21.

池上知子（2014）．差別・偏見研究の変遷と新たな展開—悲観論から楽観論へ—　教育心理学年報 53，133 － 146.

伊藤　悟（1998）．『同性愛者として生きる—すこたん企画奮戦記—』明石書房　p.30 － 31.

石丸径一郎（2003）．レズビアン，ゲイ，バイセクシュアルについて　心身医，44⑻，590 － 594.

伊藤瑠里子　葛西真記子（2011）．セクシュアル・マイノリティの抱える「生きづらさ」とソーシャルサポートのあり方—女性同性愛・両性愛者への半構造化面接を通して—　鳴門教育大学教育研究紀要，26，95 － 103.

唐沢　穣（1999）．外集団均質化効果とステレオタイプ　現代のエスプリ，384，44 － 52.

葛西真紀子（2011）．同性愛・両性愛肯定的カウンセリング自己効力感尺度日本語版（LGB － CSIJ）作成の試み　鳴門教育大学紀要，26，76 － 87.

河口和也（2000）．同性愛とピア・カウンセリングアカーの電話相談の経験から　臨床心理学研究，37⑷，70 － 73.

桐原奈津　坂西友秀（2003）．セクシャル・マイノリティに対するセクシャル・マジョリティの態度とカミング・アウトへの反応　埼玉大学紀要　教育学部（教育科学１），52⑴，55 － 80.

桐原奈津・坂西友秀（2003）．セクシャル・マイノリティとカミング・アウト　埼玉大学紀要　教育学部（教育科学１），52⑵，121 － 141.

高坂康雅（2010）．青年期の友人関係における被異質視不安と異質拒否傾向——青年期における変化と友人関係満足度との関連——　教育心理学研究，58，338 － 347.

西谷晋二（2014）．セクシャルマイノリティの心性に対する描画を用いたアプローチ—風景構成法と多次元自我同一性尺度の観点から—　カウンセリング研究所紀要，37，29 － 39.

Pew Reseach Center (2013). the global divide on homosexuality http://www.pewglobal.org/2013/06/04/the-global-divide-on-homosexuality/（2015年12月7日取得）

三宮　愛（2014）．女性同（両）性愛者のコミュニティ参加は健康・自尊心にどのような影響を及ぼすか—面接法と質問紙調査法による検討—　女性学評論，28，133 － 161.

須藤春佳（2012）．女子大学生が振り返る同性友人関係—前青年期から青年期を通して—　論集 59⑵，137

－145.
須藤春佳（2014）．友人グループを通してみる思春期・青年期の友人関係　論集　61(1)，113－126.
和田　実（1996）．青年の同性愛に対する態度：性および性役割同一性による差異　社会心理学研究 12(1)，9－19.
和田　実（2008）．同性愛に対する態度の性差—同性愛についての知識，同性愛者との接触，およびジェンダー・タイプとの関連—　思春期学 26(3)，322－334.
和田　実（2010）．大学生の同性愛開示が異性愛友人の行動と同性愛に対する態度に及ぼす影響　心理学研究 81，356－363.
山本章加　大蔵雅夫　重本津多子（2012）．パーソナリティとイメージが同性愛者に対する態度に与える影響　徳島文理大学研究紀要 84，85－91.
吉仲　崇・風間　考・石田　仁・河口和也・釜野さおり（2015）．セクシュアル・マイノリティに対する意識の属性による比較：全国調査と大学生対象の先行研究を中心に　新情報 103，20，1－13

付記：本論文は明治学院心理学部卒業論文（2017 年 3 月提出）に加筆・修正したものである。